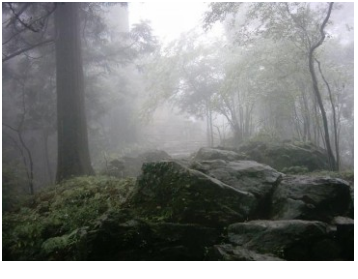
神を感じる

しづや　りふかふ



寝起きの呆けた顔。鏡に自分が映っている。

ムンクの『叫び』に見えなくもない。

唐突にこの現実に投げ入れられたような気分だった。ベッドに上半身を起こしてはいるものの、どうして起きたかも憶えていない。まだ脳内では過去の構築が済んでいない。となると、今が何であるかも又定まらないものだ。過去がないと何も成せない。



現在と称するものも、常にコンマ数秒前の過去だから。

まあ、理窟はどうでもいい。

いずれにせよ、もう起きていなければならない時間だ。眼が覚めても不思議はないし、自分の部屋にいるに決まっているし、居場所の確認をしていられる状況でもない。

いったい、何の疑いがあると言うのか。問う意味があるのか。そもそも違和感なんかおかしい。

鏡に映る自分が他者だったからといって、何の問題がある？　当然

じゃないか、〝存在〟だもの。何だっていうんだ？　いったい、それがどうした？

そう自問しながらも既に疲れている。無意味だし。今日も鏡に映る異相の自分に不安を覚えたというならば鏡を動かせばよい。１プラス１だ。わかっている。わかっているけれども、帰宅時はいつも何かに消耗していて到底できそうもないし、家を出立しようとする今のようなときにはなおさら、さらに休日ともなれば、わずかな時間であってもこんなことに費やすつもりはさらさらない。

映画ならルーズな感じで流れるレイジーなブルース・ハープの四小節が似つかわしい。だが映画ではない。しかし似たようなものだ。

「どうでもいいさ」

結局そう呟くだけで終わる。最初から見えていた。昨日の新聞と大して変わらない。

コーヒー・テーブルに置いたグラスに沈滞している昨日の飲み残しを呷った。

氷はとっくに溶けていて、ぬるい水に薄められたスコッチの残骸だ。最高のデステラリーから樽ごと輸入されたシングル・モルト、という謳い文句だっただけに無惨極まりない。だったら呷らなきゃいいのに、

これもまた想定の範囲内でありながら、なぜか頻繁にやってしまう習慣的愚行のうちの一つだ。

などという他人事を観るような想いが自動的に頭で蠢いていた。なぜ勝手に蠢くのか。いや、なぜ勝手に蠢かないなんて思い込んでいるんだろうか。

私たちは自然の一部だ。

この自虐的な含みを有する自己意識さえも自然の現象だ。私たちが感じる主体性、自由に意志しているかのような感覚はすべて做(つく)られたものに過ぎない。

そもそも主体だの、自由だのというものは、自己の尊厳を支えると

措定された捏造物に過ぎず、カタチ造られたモノ、輪郭を縁取らなければ他と選別できないからそういう輪郭があるだけの、まったくの便宜のための空架だ。

とは言え、このように思想を弁証するこれら諸考概もまたすべて空架だ。〝私たち〟、〝自然〟、〝選別〟、〝做る〟、〝輪郭〟、〝空架〟などいう諸々の考概すべてが例外なくそうだ。

だとすれば、そもそも我々は何を語っているのか。

問うても、ただ呆然と立ち尽くすのみだ。だが現実はそうもしてばかりはいられない。疑義は放置せざるを得ない。捨て擱いて日々活命せざるを得ない。

そうしなければ実業的な生活も、非日常的な芸術もあり得ない。

っていうことがわかって何になるのか？　何の足しにもならないし、結局、何もわかっていないのだ。

ただ頭が勝手に空操しているだけ。暖められた海の水が水蒸気となって雲をつくり、やがて雨となるように、又雨後に草が伸びるように、湿りに苔が生すように、自然の現象だ。

自己制御下ではない。制御下にあるときなどない。いつも自然現象だ。だからいくら思考を凝らしても何もわからなくて当然なのだ。

という論説に、いったい、誰が興味を持つだろうか。蔑まれて白い眼で見られるか、呆れられるか、莫迦にされるか、面倒臭がられるか、

いずれでしかない。

あゝ、くだらん。実にくだらない。どうでもいい。そうさ。さて。

カーテンを開ける。街には薄暈（うすぼけ）けたネオンが輝く。今日がまた始まる。今日もまたこの人生を観る。黎明を見ると、やっぱり仕方ないな、今日もやるしかない、って気持ちに落着する。Moving Picture. 意識は映画みたいなものだ。時間性という序列で、時間というキャリアに運ばれる。そういう形式で展開する意識。あゝ、意識か。意識。

虚しい言葉だ。

この意識とやらは、いったい、何なのか。

何が起こっているのか。

本当に我々が考えているような構図なのか。確かめようもない。

つまり主体である我々がいて、我々の五感に訴える事象があって、その五感を結集して意識に於いて観じている、という構図。主体と対象が対峙しているという構図。

その状態に於いて、対象をそのあるがままに、〝意識〟という場所で映写している、という現象が起こっているのかどうか、どうやって確かめられようか。

観ているものがそのあるがまゝなのかどうかも。そもそもあるがまって何だ。事実って、いったい、どういうコンセプトなんだ。

すべて我々はただ一方的に観じさせられているだけだ。

もしも自分の外に立って、自分が何をしているかを観察できれば少しは何かがわかるだろうか。他人がもし、自分と同じことをしているのだとしたら、他人の動きを観察すれば、自分が何をしているかもわかるのか。

いや。

今と何も変わらないだろう。どんなことをしても、結局、それを「自分が観ずる」のだから。

あゝ、くだらない。聴衆もなく自分で敷衍して何になる。

誰がかような虚しい論議に嵩ずるだろうか。虚しい。そう感じながらも、脳裏の議場では、勝手に思惟が論議を進めてしまう。

『そもそもこの観じているという〝観じ〟とは、いったい、どういうことなのか、それ自体、何なのか、どういうことが起こっているのか。

我々は受諾するしかなく、批判など、遣り方がない。しかも批判自体、そうとしか観ぜられないから、そう観ぜられているだけに過ぎない。

ア・プリオリに、そう観ぜられるよう、造られているからだろうか』

いつまでも考えても仕方ない。

ベッドから出た。

暖房が利き過ぎているのか、渇く。乾燥は嫌いじゃない。風邪のウイルスは乾燥と寒冷で活発になる。温湿に蠢く生物らとはまったく逆だ。

ちなみに、ウイルスは生きものじゃないという、ウイルス非生物説がある。細胞がなく、遺伝子という設計を有した構造体、分子ロボット、新陳代謝しないから自分ではエネルギーが造れなくて、ただ生命体に寄生して自分のコピーを増産させる装置。Coolだ。

生命という存在への否定である。生命の最大の敵だ。生命という在り方への、最大の敵だとも言える。生命の天敵だ。

生物の歴史はウイルスとの闘いの歴史と言ってもよい。雌と雄とが

分かれているのは遺伝子を入り混じらせることが目的だが、これもウイルスへの対抗措置だ。もしも遺伝子の型に多様な組み合わせがなくて、皆同じ型だとしたら、型の合うウイルスが出て来てしまったときには一斉に滅してしまうことになる。だから雌雄は分かれ求め合うのだ。男女の愛など夢想に過ぎない。

種の存続へと駈り立てるための幻影だ。だから恋愛小説なんてくだらない。歌も恋ばかりで呆れる。子孫繁栄がいかに強烈な生命の命題であるかがよくわかる。ま、愚痴っても、どうしようもないことだが。

真実を探求すべき哲学さえも虚しい。

すべては私たちの観察やら考概やらが正しいという、無条件の前提

の下で成り立っている。それらは唐突に、暴力的なまでに、〝価値〟として自らを暴きあらわれる。だからそれが正しいか、真実かどうかは、検証不可能なのだ。それなのに、すべての哲学はそれらを必須として、砂上に成り立っている。

理窟なんて影みたいなもんだ。

どのみち、何もかも気の迷いのようなもの、霧、〝心的な現象〟でしかない。

観（意識）に基づいて、既に設定されていた概念が自然（じねん）と髣髴し、論理と称する形式に嵌まっているかのように、Aを，Aと言い換えると、なぜか理由はわからないが納得という心的現象が起こ

る。すると、あら不思議、理解が遂げられたと感じられ、猜疑の焼き鏝の焦熱も癒やされ、心が収まる。

ただそれだけに過ぎない。*Never More!*

だから人生は美しい。

湯を沸かす。ケトルから上がる湯気を見る。冬の未明の湯気はどうして心を癒やすのか。

私は保温器から熱いタオルをつかんで洗面室に行った。

香りの附いたオイルを顔に塗ってタオルで温め、お気に入りの剃刀

を手にする。

オッカムの剃刀・・か。いや、それはむろん、何の関係ない。14世紀のフランチェスコ会士、オッカムのウィリアムがどうして関係あろうか。勝手に思考が蠢いているだけだ。脳神経細胞がイオン・チャネルを開いて、神経伝達物質を飛ばし、次の脳神経細胞のイオン・チャネルを開いているだけだ。そして象牙のハンドルの附いた刃の薄い剃刀を手に取り、剃刀を愛でることもニューロンの伝導に拠って起こるのだ。

剃刀を賞翫し、目の粗いタオルの上に擱く。

シェービング・カップのトレイにシェービング・ソープを置き、カ

ップの方には先ほど沸かしたお湯を注ぐ。湯の熱が伝わってソープが暖まる。穴熊の毛（穴熊の腹の毛）のブラシでこすって泡立てる。穴熊のものは豚毛とは違って、水分に浸しても、毛が束になってくっつくことがない。適度な油分のせいであろう。ふんわりほんわかとした状態のまんまだ。ブラシと泡が暖かくて柔らかくて、かろやかに撫でられるようで、官能的ですらある。

顎や頬が気持ちよい。

フィレンツェにあって、世界最古の薬局と言われるサンタ・マリア・ノヴェッラの石鹸をつかんでシャワー室へ。



ココナッツ・オイルの香り。顔を洗う。体を洗う。粗いパイル地の

タオルでぬぐう。アーモンド油・鶏卵末・蜜蝋のハンドクリーム。海島綿のシャツを着てシャツを着てネクタイを締める。オーダーメイドのスーツはいつも洋服ブラシで入念に手入れをしている。ボタン・ホールが美しく見えるクラシカルで美しいフォルムの象牙ヤシのボタンは特注したものだ。

コーヒーを淹れ、パンを齧る。濃厚で芳醇なチーズを食む。昨晩、つまみで食べたブルーチーズを想い出しながら、ブルース・ハープに眼が行く。地口的な連想だ。ふっ。などと焦燥を演じる失笑を洩らしつつ、今夜はバーボンとシガーにしようなどと取り留めもなく思う。フレイバーが絡み合って最高になるはずだ、と。

クローゼットを開けて、バーバリにするかアクアスキュータムにするか迷う。

どちらもレイン・コートだ。乾燥注意報の頻発する季節、雨が降るはずがない。本来なら襟に天鵞絨の附いたチェスター・フィールド・コートにすべきだろう。どうしてもトレンチにしたくてこうするのだ。シルエットが好きだからだ。



マンションの玄関を出て、扉の上のメーターがあるエレベーターの前に立つ。飾り柵が附いていて、クラシックなタイプだ。まず柵が折

り畳まれるように開き、それから本扉が静かに開く。

一階に降りて木目の美しいイタリアのアンティーク家具のエントランスを横切る。ゴブラン織が壁に掛けられ、椅子には繻子が張ってあり、刺繍が施されている。出た。空気が頬を切るように感じる。まだ未明なので間接照明が点くのみで調度類は沈としている。

大陸から大寒波が来ていて列島は冷気に包まれていた。空には鏤められた満天の星、寒々しい外灯。すべてが蒼い暗さに凍っている。

襟を立ててバス停に立った。四〇棟の高層マンションがラビリントスをなすこの大集合住宅群の中を無料で巡回するバスは5分おきにやって来る。耳も鼻先もマフラーに埋めた。そういう時、いつも思い

出すのは『オリエント急行殺人事件』の冒頭だ。アレッポの駅、寒い早朝、エルキュール・ポアロ。

バスが来る。

まだ6時前なので席はたくさん空いていた。深くうずくまるように坐ってスマートフォンを出し、経済新聞の有料アプリを開く。いくつかの記事を記録用アプリにクリップする。ポケットからスキット・ボトルを出し、舐める。

北駅前ゲートで降りてエスカレーターで昇り、陸橋を渉って高架の上にある駅の改札を通る。ＩＣカードのチャージが足りているか不安だったが、まだ足りていた。そんなものだ。思い返せばチャージ不足

で改札を閉じられてしまうのは、何も考えていないときが多かった。経験則に従えば、ムダな心配は重要らしい、ということになる。

自動券売機でＩＣカード内にグリーン券情報を記録する（グリーン料金はチャージ残高から差し引かれる）。快速のグリーン車に乗って坐席上部にある読取機にＩＣカードをタッチする。チケットレス・システムってわけだ。

車内改札を省略することができるというだけのことだが、（かような自分を無様だと思いつつも）何となく満足感がある。

クラシカルな紙ベースの本をバッグから取り出す。スマホや電子書籍にたまに飽きるのだ。青いインクの万年筆でメモ帳に書き込みをす

るときもある。クラウドできないので不便だが、微細な快があり、手作業の方が記憶に残る気が・・・しなくもない。

景色は流れた。明るみを増す。６時４０分。今日も何もない一日だ。プレゼンや見積もりの締め切りに追われたり、苦情を言われたり、報告や資料を急に作らなければならなくなる一日があるだけだ。大学や省庁から照会や調査が来たりする〝雑用〟も煩わしいが、ただそれだけだ。どうせ私もいつか死ぬし仲間も死ぬし敵も味方も他人も皆死ぬ。時がすべてを解決する。

死か。

またも頭は空転する。死とは何か、と。それは虚しい質問なのだろ

うか。宇宙が無限か有限かを問うように実益のない、虚しい問いなのか。確かにそれが解って何になるのか、とは思う。だいたい、無限ってどうやって確かめるのか、無限なのに。死も似ている。そもそも答なんかないはずだ。あっても意味がない。死を問うのは死を納得したいからだ。その動機の奥には、死にたくない、と言う気持ちがある。ならば解を得ても死ぬのだからムダだ。

そもそもすべての存在・考概が答のあり得ようのない〝もの〟なのに、いったい、何を理解了知し、何をしようと、どこへ逝こうとするのか。

だが私は会社に行く。時間だ。急ごう。乗換だ。

キオスクで全国紙を買う。ニュースを見る。生きている現代を観覧する。プラット・ホームで待ちながら小さく折って読む。太陽が昇り、朝になった。

カートを牽く老夫婦がいた。きっと旅行だろう。特急電車が着くとホームのゲートが開き、電車のドアが開く。指定席に坐る。鞄からタブレットＰＣを出し、昨晩の資料を確認する。いくつかメールを打つ。ハイデガーを読む。またＰＣをタッチし、定期購読の雑誌を拾い読み、スキット・ボトルを傾け、舐める。新しいジャガーの記事を眺める。

読んではいない。コノリー・レザーの香りが鼻先をかすめたような気がした。タンニンで鞣した革。ブルーチーズが食べたくなった。

「交感 *Correspondances*」という詩を書いたのはボードレールだったか。詩集『悪の華』。検索する。すぐに見つかる。マラルメのことが頭に泛ぶ。マラルメ詩全文というキーワードで探し、「海の微風 *Brise Marine*」という詩の原文と翻訳を読む。いや、原文は眺めただけ。ジャガーの記事と同じ扱い。

駅を出て歩く。高層ビルの23階から26階が勤務先だ。エントランスを抜け、エレベータ・ホールへ。まだ人が少ないから渋滞も生じていない。ＩＤカードを当てて社内に入る。数台のＯＡデスクで作られた

四角い島がいくつもの列をなしている。その上には無言のレターケースやディスプレイの縁に附けられた附箋、ノート・パソコン及びタブレット、デスク・ライトに小さなデスク・マット、ペンと鉛筆とブックエンドと書きかけのメモ用紙……

無味乾燥、意味不明、無色透明、非存在すらも存在し得ない。無空すらもない。

群島を渉って自席に漂着する。

社内はまだ数人しかいない。何人かは昨日からいるに違いない。同情はない。他人事だ。私が過労死しても誰も気にしはしまい。親しい者は仕事の負担が一時的に増えることを気にするかもしれないが。

そうだとしてもさほど心配はいらない。替わりはいくらでもいる。

マフラーを丁寧にたたんで脇机の下の段に収め、コートを折って机下のキャスター付き小型収納にしまう。足下にかなり余裕があるので苦はない。

私は愛用の皮革製ペン皿を満足気に眺めながら、小さな携帯用ポットに入れたコーヒーを飲む。早朝の出勤は自宅が遠いためだが、人に会う時間を少なくするためでもある。今の担当業務が没交渉的でも成り立つからそれを活かしているに過ぎない。

こういう環境が整ってこそ人は初めて思考する。ムダだが。いや、ムダですらない。

なぜなら思考、概念、論理はその妥当性の検証がなされていないものだからだ。妥当性が検証されていなければ、信頼性は零だろう。

だがしばし待て、検証とは論理の手法であり、論理を用いるものではないのか。

とすれば検証前の〝論理〟という道具を使ってしまうので、おかしな話になってしまう。さらにもう一歩進めて考えれば、『未検証なものを使ってはいけない』という判断も、論理に依拠するもので、話はもっとややこしくなる。

どこにも到達できない。

だから不能という結論にも到達できないどころか、それ以上で、何

一つ遂げられない、収まれない。未遂不収だ。

思考、概念、論理はその妥当性ばかりか、すべてが未遂不収で、たとえば、なぜそういうカタチになったか、どのようにあるのか、その設定の理由、そういう枠が設けられた必要性、「どのようにあるのか」の「どのように」とは何か、いかような在り方か、在り方とは何か、それら絡繰りのコンセプト、どれもこれも妥当性の検証が不能だ。

しかし、先も言ったように、これら未検証なものと特定することも、未検証なものは判断材料とはなり得ないという判断も〝論理〟とやらによる〝もの〟で、すべては否応なく検証不能な〝論理〟に依拠せざるを得ず、いったい、どのように解すべきなのか。「そうではない」

と否定することもでき…いや、できずとも言えず、いやいや、そうと言えるか？　この場合、エポケー（判断の暫時中止）は正しいか？その判断も又。

暇と静寂がある方はどうか永遠に思考し続けていただきたい。私はしない…いや、毎日しているか。現実に呼び覚まされるまでは。

凛々たる声が孤独と現実を蔽う狭霧のような静けさを壊す。

「おはようございます」

同じ島の八嶋瀬羚奈（やしませれな）だ。ドキッとするとともに、一気に緊張する。私よりも一〇歳以上若いが、とても優秀だ。私の苦手な女性、いや、彼女が怖いのだ。眼鏡を直しながら、私はおどおどと応えた、

「あ、おはよう、おはようございます」

いつもどこかに声が引っかかる。自然な発声ができなくなる。さっきまでのシニカル&ニヒル（自称）な態度は何処へ、いきなり萎縮してしまう自分に嫌悪を覚えながらも、それもおつなものなどと勝手に脳は思考している・・・

現実とはこんなもんだ。理念の世界と現実との乖離だ。偉大な哲学者も、ただの売春宿通いの爺だったりするように。

彼女はそんな私の葛藤も知らず、毅然とした態度で着席し、屹とPCを立ち上げた。相変わらずだ。

濃い碧の地中海を空想させる深みのある紺のスーツはシルクで、時

計は大理石の聖堂のようなクラシカルなブルガリ、貴金属はプラチナのブレスレットは古典ギリシアのデザインがされている。原コリント様式のオルペ（ワイン容器）にあるような山羊、スフィンクス、ライオン、雄牛の図柄が彫琢されていた。

歴史は夢を誘うが、彼女は何を考えて選ぶのか。人の観にはなれないので何もわからない。私たちは閉じられた球体だ。親子や夫婦であっても死には立ち入れない。……

「天平さん、昨日、供覧されていた報告書、見ました？」

清冽な言葉。

「見たよ。何かあったかな」

少し恐る恐る聞いた。彼女は鋭敏だが、私は大間抜けで、自分の作ったものであろうと他人の作ったものであろうと、文書に記載された法解釈の錯誤やプランの欠陥や事務的な遺漏や変換誤り等に気附かず、見落としたまま回覧し、彼女に指摘されて恥をかくこと多々だったから。

私の後に彼女が見るという流れが仕事のフローなので、私が彼女の見落としを見つけることは物理的に有り得ない、と言うのが唯一の自己弁護だ。言うまでもなく、そんな情けない言い訳は心の中で自分が自分に対して言うのみではあるが。偉そうな思料をしてはみせても、所詮、こんなもんである。

「神栖檜偏村のことです」

「あ、あゝ」

少し安堵した。

会社が委託されている某地方自治体の広報紙のコラム記事のことだ。

うちの会社はもともと八〇年代に大学生が創ったコンセプチュアル・アートのパフォーマンス集団『キャラバン』で、芸術活動しながら在学中に起業したのが始まりだった。ウェブのデザインや劇・ＴＶ番組のアート・デザイン、アニメや映画のアート、リーフレットや広告・広報紙のデザインを請け負う仕事が中心で、代表取締役や役員ら

も私とさして齢が変わらない。

そういった仕事の一つでやっていたコラムだったが、何處のお役所も財政難の昨今、市町村からのこういう委託は珍しい。推し測るところ、どうもその村は資金が潤沢らしい。いや、これは適当な憶測ではない。

この村は、これといった産業もなく、まして村民少なく、法人や村民からの税収が多いというわけでもないが、裕福なのだ。実際、私は知っている。

何しろ、我が故郷に近いから。私の村も含め、その辺一帯の村は古来、富裕のお国柄で、私がけして高くない給料の割は暮らし振りがよ

いのも、そのせいである。この齢になっても仕送りをもらう身なのだ。だから頭も空燥するわけである。

くだらない余談だが。

「あれじゃ使えませんよね、咲御魂獅厨痲神社（さきみたましずめ）の写真です」

「…あ、あゝ。

光が入ってた？かな…」

……もっと光を。って虚しい洒落をなぜ言うのか、呟きですらもなく、心の中で。虚し。

「何が可笑しいんですか」

「あ、いや、別に。ぅ、ん、何でもない」

「本当ですか。何か思い出し笑いみたいでしたけど」
「そんなことない」
「何を想い出していたんですか。わたしの話、聞いてくれていましたか」
「むろんだ、聞いていたさ」
「で、どう思いますか」
「た、確か、彼にはプロのカメラマンも同行して行ったんだよね？確か…」
「もちろんです。仕事ですからプロを使います」
「そうだよな……。じゃ、やり直してもらおうか」

「予算が足りません」
「こちらの手落ちだから負担しても已むを得まい」
論理的にはそういうことだ。論理は形骸以下の〝もの〟だが。現に私は論理が形骸となっている荒野に遭遇している真っ最中だ。
「カメラマンの手落ちでもありますよ。そもそも安蘇さんの仕事はいつもいい加減、適当、アバウト、でたらめなんです。カメラマンにこれじゃダメだって、ちゃんと言わないんですよ、きっと」
……どうせ世の中には、でたらめしかない。
「え？」
「あ、いや、何でもない。……うん、まあ、そうかもしれないね。そ

うでないかもしれないが」
「どっちですか。
だいたい、あんな写真を平気で上げてくるカメラマンもプロ失格です。専属だったら契約打ち切るよう進言しましょう」
「そうだね。それでもいいね」
「それがいいと思います。再撮影には、わたしが行きます。プロのスケジュールはすぐに取れないかもしれないし、経費削減の意味もありますし」
「ええ？　村に？　だってメディアＢ２の担当業務だよ」
「ですから抗議の意味でもあるんです。敢えてわたしが行きます」

「カメラマンは？」
「ですから、わたしがやります。再撮影します。わたしがやれば経費の削減になります。違いますか。
って言うか、さっきそう言ったつもりなんですけど」
「あ、あゝ、そういう意味だったのか。しかし素人写真では・・・」
八嶋が私の双眸を見た。
「この会社に勤める前は、フリーランスで物書きをやっていたんですが、取材しながら掲載写真も自前で撮影していたました。
職業カメラマン並みの機材もノウハウもあります」
「そうだったのか」

関心がなくて知らなかった、とは言わなかった。
「それに、実家が近くて、土地勘も少しあるんです」
「経理が通らないんじゃ」
「休暇を取って自費で行きます」
「そこまでしなくても」
「別に。
時季外れの帰省だと思えばいいんです」
「思えないよ。わかった、私も行こう」
自分でもどうしてそう言ったのかよくわからなかった。当然、彼女は眼を少し丸くし、

「え？」
と言ったので私は仕方ないのだという感じの顔を作り、
「実は私も実家が近いんだが、金がなくて年末帰ってないんだ」
「公私混同ですよ」
「仕事はするさ。
すべて現象は考え方の問題でしかない」
どうでもいい。又は、とてもかくても候。

私は旅行の準備をした。と言っても大したことはない。いつもの旅

行鞄に着替えとグルーミングセットを詰めて、後は移動図書館を附けるだけだ。

移動図書館とは小型の革製バッグで、Ａ６判並製小型叢書（いわゆる文庫本）や、糸綴じのハードカバー（上製本・本製本・厚表紙本など）が5〜7冊入る。自分のお気に入りや読みかけや気になる本、その旅先で読むに相応しいものを選んで詰め込む。そして当然、電子書籍リーダーも。中に細かい仕切りがあって、文庫用のポケットや重厚な装丁用のスペース、その時点で特にリスペクトしている本を収めるＶＩＰスペースなどがある。どのような順序でどのように配置するかが楽しみの一つだった。ここは本のアパート、いや、城であり、私に

とって空想の城砦都市であった。

輝かしき髪靡かせる英雄がいて、鬚が長くて思慮深い王がいて、鋼の鎧の誇り高い騎士がいて、美しい姫がいる。賢い従者がいて、太っちょの肉屋の親爺がいて、ベルベットを着た商人がいて、鼻の大きな気難しい顔の鍛冶屋がいる。

路地裏は狭く複雑で、二股に別れた未知の右は昇りで左は下りで、道の分岐点にある建物は三角形の敷地に三角柱の形になるように石を積んだものだ。バーでは皆が立ち呑みでビールを陶器のジョッキで飲んでいる。常連は個人専用のジョッキを小さな木製ロッカーに入れる。ロッカーの木扉には鍵が掛けた。朝、仕事に行く前に立ち寄り、

鍵を開けて飲む一杯のビールは、彼らの間では第二の朝食と呼ばれている。

昨日は海岸地方から羊が数頭運ばれて来た。海の汐風を吸った草を食むその肉は塩分が滲みて滋味深く、独特味わいがあって評判のよいものだ。

古い石積みの家、藁葺きの屋根。教会は小さいが、鐘楼が逆光を浴びて象徴のように天を衝くように聳えている。碧空はまるで鐘の音のように明朗だった。晩鐘が鳴れば、きっと畑で農夫は祈りを捧げるのであろう。坂道の多い村で、中心を行く路は村の真ん中で岐路になっていて、右は上り路、左が下り路となっている。岐路に建っている3

階建ての家は船の舳先のように見える。

雨外套の旅人が時折通過する。巡礼者のようだ。驢馬の牽く農夫の馬車がゆっくり進む。バルでは髯を蓄えた男たちが立ち呑みをし、談笑している。雲雀の囀り。糸杉とポプラが明るく照らされていた。村で一軒しかない旅籠からはグリルで肉を焼く匂いが漂う。胡蝶の夢の喩えではないが、いったい、どちらが夢で、どちらが現実なのか。私は恍惚とする。

本人の希望としては夢と言われる方が真であって欲しいし、そのように希望するのにそのようになっていないこの悪礙の世界は、いったい、何なのかと腹立たしく思うも、考えても仕方ないことは考えても

仕方がないというトートロジー的な結論に終わる。これが常だ。

夢を観ずには生きられない。楽しいのだから、支障がなければ止める理由がない。だから止めるものか。果てしなく空想する。紡げば紡ぐだけ、夢は無際限に紡がれる。

「さてさて、そんな場合じゃない。支障はあるよ。ここは現実だ。眼を醒ませ。手早く作業して就眠しようぜ、天平くん」

そう言いながらも溜息する。なぜ溜息なのかもわからない。

この世にわかっていることなんてあるのか。

ない。Q.E.D.（Quod Erat Demonstrandum、ラテン語「かく示された」、「証明終わり」の意）

鞄にミンク・オイルを塗って磨いた。金具の一つ一つにも職人の技が生きる品だ。大事にしている。鞄は何も言わない。だから真実のような気がする。茶人が碗を愛でるように、何でもないものにこそ超越的な真理があり、寂びて枯れて奥深い。

侘びと枯れるとか、寂びとか凍えるとか、どういう動機から生まれる好みなのか。そのメンタリティには様々な空想の余地があるが、多かれ少なかれ、人間にはそういう興味が備わっている気がするし、その動機は複合的複雑系的であるような気がする。

それは、「偉大なものは鳩の足でやって来る」というような逆説的で、魁偉なるものや壮大なものや荘厳なものや繁文縟礼的なものや深

淵なるものや輝かしきものや複雑精緻なるものや甚深なるものや幽玄にして壮麗美麗なるものや瀟洒や華奢や奢侈なるものや豪華絢爛百花繚乱的なものへのアンチ・テーゼであるという一面と、陰極まって陽となるというような、究極のさらに上である超越的な境地というニュアンス、又は唐突で、武骨、理不尽なものへの憧憬、あるいは原初的なものへの回帰、単に叛骨的嗜好、意外なものとしてはヘヴィ・メタルのゴリゴリしたギター・サウンドへの好みとの共通性……等々が想起されるのである。他にもまだまだある。

いつか死ぬが、それを乗り越えられない自分がそのままで真理奥義であるという感覚も同じようなものなのかもしれないし、そうでない

のかもしれない。

草原だった。

艸限顱斐之原（くさかぎろいのはら）は渺茫とした、どことなく凄まじくて、荒涼とした感じの原だった。草原と言っても、冬なので緑はなく、また不思議と今年は雪もないために、渺茫たる枯草の原だった。この季節に雪がないことは観測史上初めてらしいが、風は尋常じゃなく冷たかった。頬が切れると言うか、凍ててぱりぱりと崩壊しそうだった。

山々に囲まれたこの平らかな土地の中央に塚がある。土が少し盛っ

てあって、樹齢千二百年の大樹が立っていた。平安時代に古戦場の慰霊のために植樹されたと風土記に書いてあるようだが、確認はしていないし、その時代にそういう習慣があったかどうかも確かめてはいないが。

木の下には祠があり、それは江戸期のものだということだ。

タブレットで資料を見ながら八嶋が言った。古代もタブレット（粘土版）を読み、今も眺める。

「西暦五八八年、ここからさらに北に行った眞神郡で、眞神の豪族であった彝之昂弖乃（いのあてない）が飛鳥（あすか）・斑鳩（いかるが）を撃てと檄を飛ばし、周辺豪族が結集したそうです。

最初の戦いがこの艸限顱斐（くさかぎろい）で交わされ、風土記に拠れば、眞神郡の圧勝だったとされています。実はそれに関する大和朝廷側の記述は少なく、「胡戎亂ず。大軍將会ふ」と記すのみです。

ちなみに会うとは会戦の意味だそうです」

「古戦場か。どうもそういう雰囲気だね。何だか凄まじいものがある」

「しかし大和朝廷は現在の安房市に当たる火々禽（ほほとり）の柵（き）で、胡戎（えびす）の兵（つわもの）を撃破し、以後、まつろわぬ眞神の一族は夷俘（いふ）となって大和への朝貢を義務付けられる者となったそうです」

「ふーん、柵（城）というのは7世紀（６０１～７００）以降だと思っていたが・・・まあ、いいや。

結局、負けてしまったんだ。勝負は時の運っていうけど、虚しいなあ。負けちゃ意味がないよね。しなきゃよかったのに」

「仕方ないじゃないですか。已むに已まれぬ状況だったんだと思います。民族の自立、自由のために。それに、最初から勝ち負けが判っていれば誰も苦労しません、何事も、そうでしょう。現代だって」

「ふ。そうかなあ」

「そうですよ。そんなことよりも、この近くに資料館があるそうです。行ってみましょう」

「資料館？

神社の撮影とは関係ないんじゃないか」

「すべては遺漏のない綿密な調査によって精確を得るのです。表に出るものは氷山の一角であっても、海面下でそれを支えるのは膨大なデータなんです。因縁があるかもしれません。行かなくっちゃ何かを見落とすかもしれないんですよ」

「ふうん」

私の耳には、ルーズなテンポで流れるレイジーなブルース・ハープが聴こえていた。

来たときと同じようにタクシーを呼び、長い時間待たされた。タク

シーの中では短い時間だったが、本を読んだ。

日本紀略によると、蝦夷の族長、反朝廷勢力の将、自由と権利を叫ぶ阿弖利為（アテルイ）は、副将である母礼（モレ）とともに、延暦二十一年（西暦八〇二）八月十三日、河内国において、坂上田村麻呂によって斬られた。

だが、蝦夷の抵抗は収まらない。

アテルイの子、人首丸（ひとかべまる）は十五、六才の少年で、坂上田村麻呂に連れられたアテルイを待つも、斬殺されたという報せを聞いて、悲涙憤激し、駐屯している朝廷軍に夜襲をかけた。

襲撃した者らの中には、女も少年もいたらしい。しかし、朝廷軍の

反撃により、東の山へと逃げざるを得なくなった。

伊手川を上り、田原の鬼渕に身を隠すも、朝廷兵に見つかり、川上である藤里の愛宕山の洞窟に潜み、ゲリラ的に奇襲をかけては抵抗したが、次第に山峡をさらに川上へと退かねばならなかった。山を越え、北側にある人首川上流、人首の村落（現在の米里）へ、そしてさらに東に、種山高原に遁れる。

彼らは物見山（種山）の北西の大森山の岩窟の中に立て籠もった。総勢二〇名に足らず、昼は身を隠し、夜に険阻な山を走り、朝廷軍を襲った。だが次第に人数も減り、遂に大同元年（八〇六）、人首丸は残った三名の者とともに最後の戦いと決し、襲撃して遂に首を斬られ

る。

江刺市米里の大森山の西に「鬼っ子の墓」があり、洞窟には観音堂が立てられていた(現在は麓の玉里に移され、大森観音となっている)。だいたい、そういう内容であった。

どうやら人首丸は田村麻呂に騙されて父が帰って来るものと信じ込まされていたらしい。ちなみに彼は美しい少年であったという説があるらしいが、これは確かめようもない。しかし古代へのロマンを駈り立てられるものだ。歴史は常に推測でしかない。

眼の前で見ていてさえも真実は観えないことが多いのである。ましてや歴史に正確など期待できるはずがない。史料に一〇〇%の保証は

ない。蓋然性の域を出ないという態度が、誠実かつ正義の態度である。それ以外はすべて悪だ。

ところが悪が負けるとは限らないのが現実の悲しさ。むしろ悪は永遠の勝者だ。科学的精神や法の精神は軽んじられ、大概の人間は疑うことは否定することだと短絡的に決めつけて憤慨する愚劣さを持つ。懐疑は常に中立、ニュートラルだし、そうでないものは懐疑ではないので、中立・ニュートラルでない懐疑は存在しない。

真の懐疑を否定であると妄りに想い込んで反駁する者は愚劣であり、世界進化の邪魔だ。

懐疑は科学の代名詞でもある。科学は現代の正義だ。科学精神は常

に超越的立場にあり、それゆえに一切を批判する。常に批判がなければならない。批判されないものは腐敗する。この世に絶対というものはないが、唯一絶対と言えるものが、これだ。

資料館は屋根の高い平屋で、想像より遙かに立派な建物であった。唐招提寺の礼堂を思わせる水平の強い入母屋造だが、瓦ではなく檜皮（ひわだ）葺（ぶき）で、渋い唐紅の円柱が使われ、柱には龍神が絡まり（そもそも長い立柱自体が龍の象徴である場合がある。ちなみに龍以外にも彫り物の多い、あたかもトーテム・ポールのようなこの柱はリンガ（男根）を

も匂わせる雰囲気があった）、閲覧室の書棚にも無垢の檜（ひのき）が使われ、清廉な木の香に満ちて落ち着いた、ゆったりとしたスペースである。コノリー・レザーのような上質の革張りソファに坐って、メイプルの閲覧机に肘を突く。

巻物を瀬羚奈はじっと見ていた。

ばかばかしい。

どう見ても江戸中期以降のものだ。

筆の字遣い、色彩の残り具合、どれをとっても素人でもわかるレベルだ。

「天平さん、これに拠れば、眞神の大貴族であった天平天憤呬火去（あふれひこ）が

艸限顱斐に砦を建て居城し、大軍の將、多比見大津琉義と対峙したようです」

「大軍の將？　征夷大将軍とかじゃないの？」

「征夷大将軍は太平洋側の地域を攻める将軍です。日本海側は鎮狄将軍と言っていました。ただし、この当時はまだ鎮狄将軍の官職がない時代だったようです」

「くわしいね」

「それより天平さん、こっちに親戚がいるって言っていましたよね」

「実家だ。ここじゃないけど。眞神郡だ」

「感じないですか？」

「何を？」
「天平天憤咽火去って書いてあるんですよ」
「さあ、別に何も。そうね、彼はもしかしたら遠い親戚の先祖かもしれん。だが、いずれにせよ、千数百年も前の話だよ。じゃ、訊くが、君はミトコンドリア・イブにシンパシーを感じるか？」
「わかりました。感じません。
ところで、天平氏は眞神族の大貴族だったようです」
「そんなことが書いてあるのか。ここは民族主義の洗脳施設らしいな。どうか、ジョン・レノンの歌を想い出してくれ」
「は？　誰ですか？」

「呆れたな。
小学一年生は1プラス1の次に、ジョン・レノンを学習すべきだ」
「その人は何を歌ったんですか」
「こうさ、〝国がないと想像してごらん。殺す理由も殺される理由もない〟ってね。生きる本質に於いてとても重要なことだ」
「理想主義過ぎてリアリティがないですね。
さあ、仕事をしましょう」
「君は素敵だ」
声を聞きつけたのか、館長と称する男が現われた。伊叡敞参座武郎（いせべさんざぶろう）と名乗った。暗鬱に見えたのは気のせいだろう。そのときはそう思っ

た。八嶋が少しだけ眼をぱちくりさせる。
「天憤呬火去は騙し討ちにあって無念の死を遂げました」
まるでお悔やみのような言い方だ。
「ほう、騙し討ちですか」
「敗戦の将であった大軍の将、多比見大津琉義（たひみのおおつるぎ）は天憤呬火去に和議を申し出ました」
八嶋が眉を上げる。
「和議だなんて。敗軍だったのに」
「そうです。
降伏ではなく、和議でした。撤退すれば追撃を受けて殲滅の可能性

があります。だから和睦するか、全面降伏するしかなかったのです」

私は興味なかったが、一応訊く、

「でも眞神軍の勝利だったんですよね」

「その戦に関しては圧勝でした」

「見てきたように言いますね」

「口伝もあり、古文書もあります」

「まあ、そんなものはどうにでもなりますが」

館長は眉を顰めた。

「そう言ってしまっては確かなものなど何もありますまい。

…まあ、結構です。どうぞ、ご勝手に」

立ち去ろうとする館長を八嶋が引き留めた。
「どのような騙し討ちだったのでしょう」
「宴です。
和睦の証に宴を催しました。すべての剣を大地に投げ出し、和議することを希いました」
「受け入れてしまったんですね」
「そうです。しかし天憤呬火去も最初は疑い、強靭なる強者を十数名随えて訪いました」
「当然ですね」
「舞いが始まりました」

私は言わずにいられず、

「鴻門※の会のパクリじゃないでしょうね」

※紀元前206年に楚の項羽と漢の劉邦が咸陽の外で行った会見。

「なるほど、言われてみれば似ていますね」

「最初から結論を持って物事を研究しようとする者は常に事実に気が附かないものですよ」

館長は咳払いをした。

「多比見大津琉義（たひみのおおつるぎ）は剣を持った若者を指名し、剣舞を舞わせました」

「結論が見えてしまったな」

「剣舞と見せかけて、その振るった剣で天平天憤咽火去（あふれひこ）は惨殺されて

しまいました」
「すべては歴史ですよ」
そう言いながらたぶん私は微苦笑している。
再び去ろうとする館長を、今度は私が引き留めた。
「あなたはどうして」
「は」
「どうしてそんなお葬式のような顔なんです」
失礼は百も、いや、百億も承知だが、言いたくなったのだ。
彼は振り返り、コンマ三秒ほど時間が止まったかのように、わたしをじっと見たが、眼を伏せ、俯き、

「罪滅ぼしです」

そう言って去った。

罪滅ぼし？　現実と幻想の区別がつかないらしい。何という愚かなことか。千数百年も前のことだ。未だ呪いが続いているわけでもあるまいし。

資料館を出て私は束縛から遁れるかのように空に向かって伸びをし、外気を吸って両手を左右に広げ、唸った。そして俯いて大袈裟に嘆息をする。

「死して恨むか。

まあ、そうかもしれないな。

だが恨みは世間的な価値観に過ぎない。たとえば、建前を気にして遠慮したり、気持ちを抑えて我慢したり、得失に著執しては葛藤したり、権利や尊厳を廻っては怒り憎み、恋愛や勝利や名誉や利益など、架空の価値観に翻弄され、踊らされ、獲ては喜び快に浸り、又喪っては嘆き苦しみ憤激する、そういうことのうちの一つだ。世間的な気遣いに過ぎない。それが何だろうかと問い詰めれば、答のない慣習に過ぎない。

死は圧倒的な現実性で、それらを無みする。世間的価値観が滅びれば、もはや恨みに染まる余地もない。

そうさ、一切は世間的な価値に過ぎない。恐らくは死に瀕してそれ

に気が附くのかもしれない。それに気が附かないほど、強烈な体験によって強く心を遺した場合にのみ、死霊の恨みが残るのだろう」

「そんなふうに言ってしまうと、生きていること自体が虚しいことのように聞こえてしまいます」

「あゝ、実際、そうなんだから仕方ない。

すべては生きている者たちだけの、生きている間にだけ通用する価値でしかない。

それら価値観は死を前にしてその脆さを露呈する。生き続けていられることを前提に、すべてが成り立っていたことに気が附く。死ぬことはわかり切っているのに、それが一秒後である可能性は常にあるの

に、死を宣告されると悲嘆し、絶望する。実は自分が死を本気で考えていなかったことに多くの人が気が附く。普段は死について達観したようなことを言っていた人も、死を目前にして動揺し、何も手につかなくなるものだ。

死ぬなんてわかり切っていたはずなのに、目の前にした途端に、今まで重要だと思われたものを虚しく感じたり、疎ましいもののように感じたりすることすらあるだろう。

これら事実を鑑み、人々の価値観が生きていられるという前提の下に、人々からの評価を礎として成立していることがわかる。

だがこれは逆説的な希望の歌でもある。

死が世間通用の価値を超越するように、死の如く真に絶望していれば絶望はないからだ。

望みが絶えず心にあって、それが叶えられないからこそ絶望感があるとすれば、心を死にして真に世を虚しいと思えば、世間という煩いもなく、絶望も絶え果てるだろう。

だが実際は、なかなかそういうことはない。希望は細胞レベルに埋め込まれた宇宙の原理だから。きっとすべての素粒子や時空などの非物質の中にもあるに違いないよ。

だから〝世間〟というものは侮れない。それは宇宙原理なのだから、侮れないばかりでなく、〝世間〟的であることが必ずしも愚かなこと

とも言えない。

人はさように創られたからこそさように生きているだけに過ぎないのだ。

これは大いなる自然の営為なのだ。蛋白質の一つ一つに埋め込まれた、命、生への意志だ。生命体や有機体のみならず、一切の素粒子、一切の存在にそのような〝生〟への意志がないならば、それらの営みもなく、平行する宇宙も含む一切の宇宙が真の意味に於いて死滅してしまうに違いない」

「本気で言ってます？」

「大真面目さ。だから自然の声に聴従するのが正しいんだ。それが幸

福への道さ。

自然の声に随え、ってことだ。真の生き方をしたいなら、人の言う神を信じるべきではない。世間を信じるべきではない。

世間を宇宙の原理と持ち上げておきながら、矛盾したことを言っているようだが、そうでもない。

世間に従うのも自然であって一概に唾棄しないが、必ずしも幸福に繋がらないので、より幸福に近附くためにより深く自然に随うのが正しい、っていうだけのことだ。〝世間〟よりも本来的な〝自然〟が優先する、っていうことだ」

「でも、この世に自然じゃないものなんて、ないんじゃないですか」

「おっ、鋭いね。

確かに人間も自然の一部で、自然の原理に従って営為している以上は、蟻が作った蟻塚が自然の一つと呼ばれるように、マンハッタンの摩天楼も、ＰＭ２．５も、世界中の原子力発電所も、大自然の一部だと言われなければ論理矛盾だ。思い上がりだ。

だがやはり人は人工物を避け、天然を貴ぶだろう、豊穣で優しく繊細微妙で、実際の健康に優位だからだ。肉体にとって本来的だからだろう。

同じことだ。自然に聴従せよ。

現実に働いている力を信じることだ。それを真の神というべきだろ

う。それ以外は世間っていう架空だ。現実ではない。たとえば、空飛ぶ鳥たちにとっては国境など実在しない。人間が勝手に捏造した架空に過ぎないからだ。

信ずべき真の現実とは、大自然に有機し、融通して働き、動かしている運命のような力。それだ。実際の現実の力だ。睿智だ。魂だ。それが神だ」

「少し休憩しませんか」

「いいね。〝喫茶去※〟だ」

※きっさこ。禅語の一つ。お茶でも飲んで行きなさい、の意。

思わぬ大敷衍の後、やっと探した喫茶店に入って彼女はタブレットを取り出した。ドワーフやトロールの人形が梁や棚やカウンターや桟などに置かれ、様々な仕草や表情をし、小さな童話的な世界を作り上げていた。

「眞神について調べているんです」

「どうせ狂信者のホームページがヒットするだけだよ」

「どうしてそう否定的なのですか？　逆に何か隠していませんか？」

「かもしれないね」

この店の主人は私と同じくらいの世代だろう。パンク・ロックが好

きらしい。今は亡きジョー・ストラマーのポスターがあった。『ロンドン・コーリング』の印象的なリフが記憶に甦る。

「へえ。眞神族はとてもお金持ちだったそうです」

「なぜ」

知っているけど、訊いてみた。

「たくさんの財宝を積んだ船で渡来したようです」

「ふふん、宝船か。で、いつ頃」

「およそ紀元前七百年」

「信じるの？　神武東征より古い時代だよ」

「天平さん、眞神郡のご出身ですよね、もしかしたら眞神族の末裔な

んじゃないですか？　それなのに知らないんですか」
「過去なんか関係ないだろう。
今と未来だけを考えて生きていればいいんだよ。生きるってそういうことだ。アイデンティティの不足している奴ほど過去に縋るのさ」
「偏見ですね。
それもあるかもしれませんけど、そればかりではあり得ないでしょうね」
「って言うか、その出典、怪しくないのかい。真に受けるなよ」
「そうですか。疑う根拠が明確でなくては、否定することはできない。そうじゃないですか。いつになく決め付けている感があるんですけ

ど？

本当に何か隠していませんか？」

「何を隠すんだよ、私が。

で、ソースは？」

「明治甲午孟秋、彝之藤次郎治衛門之丞（眞神の旧家、彝之家出身の郷土研究家）が書いた『真神国波瀾萬丈史記』（明治二十七年七月）という地方史誌からの抜粋だそうです」

「孟秋って七月なのか」

「旧暦七月の異称です」

「そうか」

「このホームページに拠れば、五八八年の火々禽の柵の戦いも朝廷の陰謀説というのがあるそうです。彝之昂弓乃（いのあてない）が檄を飛ばしたというのも、そうするように仕向けられたか、もしくは後代のまったくの作り話であるか。

実際は眞神の巨万の財宝が狙いで、軍事的に優位な朝廷が戦いの大義名分を捏造した、というのが彼の考えのようです」

「彼？」

「このホームページの作者です」

「誰？

ま、聞いてもわからないか・・・」

「天平普蕭（ふしょう）」
「親戚だ。一回会ったことがある。かなり遠い親戚で、君よりも若い」
「最後に取材してみませんか。結構、面白そうな人です」
「そうか。そう言うなら、実家に確認してみよう、後で」
「では、行きましょう、咲御魂獅厨痲神社（さきみたましずめ）へ」
「やっと本題に入れるね」

神社には独特の雰囲気があった。
鳥居は横に渉る島木の上に反り返った屋根のような笠木の附いた

明神鳥居のようであったが、両脇に小さな明神鳥居が附いていてこれは三輪鳥居という様式になるのだろうけれど、ただ違っていたのは、島木の下に渉らせる貫が二本あり、要するに水平をなす横木が三本あって、インドの塔門（トラナ）を想わせる。

私たちは中へ進んだ。玉砂利が敷いてある路は鬱蒼たる杜の中を行く。

所々に苔生した大きな岩があった。注連縄が締めてあり、ご神体なのだろうと思わせるが、よくわからない。とても荒々しい感じの大巌だった。無言の威圧感がある。

手水舎で手を清め、口を漱ぐ。龍の鋳物の口から出る水は冷たかっ

た。

石段を上ると、社殿が見えてきた。

「凄く厳めしい感じがする」

八嶋がそう呟く。

確かに、大きな、とまでは言えないが、荘厳の観があり、流造の一形式なのか、庇の陰が深く、奥が底なしに暗く見え、幽玄な、いや、恐い感じがある。

木材も灰黒で、沈としている。沈黙が千年の間に染み入ったかのようだ。まずは一度お参りしてからと思い、拝殿の前で賽銭を入れ、二礼二拍する。手を合わせたが、合掌は仏教のみならず神道でもよいの

だろうかと今更急に疑問が泛ぶが、いつもこれでやっているし、皆これでやっているのだから、取り敢えずこれで間違いないはず、神へは失礼に当たらないはず…などと、いつものように半ば無意識的に思考していたせいで、最後の一礼を忘れそうになる。

「じゃ、行きましょう」

八嶋にそう言われて社務所へと廻った。

出て来た禰宜は名を阿曾（あそ）と名乗った。丸眼鏡で、細面、視線が定まらず、どこを見ているのかわからない虚ろな眼であった。昔々漫画で見た黄泉の国の生き物を想い出す。

神社の説明を簡単に聴くうちに、唐突に私は尋ねた。

「阿曾というお名前は九州の阿蘇山と関係あるんですか」

「アソという名は広く日本にあります。だいたい、九州の例にもあるように火山に関係が深いのです。各地にある浅間神社の『浅間』もアサマが由来です。アサマというのは、火山のことです。アイヌ語のアソウマイという言葉は火山を表わす語で、関係があるようです。そういう風に聞いています。

ちなみに、この土地では、阿曾というのも安蘇というのも、大本は安蘇生井家です。アソウマイの一族は火山信仰を持った民族で、大和朝廷の支配下にあり、眞神の一族を抑える役割を与えられていました。不本意ではあったようですが、これは仕方がなかったのです」

「なるほど」

自分で訊いておきながら不謹慎だが、「なるほど」と言うときの人間はほとんど興味を持っていないものらしい。

「安蘇生井にはお目付け役がいました。山盛弊です。山盛弊も元は独立していましたが、強力な朝廷に比較的早くから恭順していました。山盛弊は山岳民族で、山を管理し、山の幸を朝貢していました」

「なるほど」

「それらを総括して監視・管理していたのが、伊叙敝家です。伊叙敝は最も早くから恭順した海洋民族で、海の民ゆえに山の民と古代から争っていました。朝廷の力を背景に山の民火山の民を制圧したと言っ

てもよいでしょう」
「なるほど。
　ん？　八嶋さん、顔色が悪いよ」
「うちの実家、本家が伊叙敝と言います。それでさっき館長さんのお名前を聞いたとき、少し驚いたんです。館長の感じが暗いのも、何だか意味がわかったような、なぜかそんな気がします。そんな気がするんです、なぜだか」
「くだらないよ」
「そうですか。メディアＢ２の安蘇さんって、もしかしたら何か関係があるんじゃないかって」

「ほう、偶然だね」
「それに、今、思い出したんです。確かカメラマンの名前が」
「おいおい、安蘇じゃなかったぞ」
「山盛弊です。違いますか、いいえ、確か、山盛弊昭彦でした！」
「あ・・・」
そうだった。私も知っている。少し驚いた。このベタな展開に、だ。
ふ、三流漫画か、ご都合主義の三文ドラマだ。そう言えば最近、三文とか言わないな。関係ないけど。
「少なくとも絶対、純文学じゃウケないなあ。淡々とした日常じゃなくっちゃ」

「何言っているんですか。
因縁です。縁起です。あゝ、もしかしたら、写真がうまくいかなかったのも、そこに理由があるのかもしれないわ」
「いい加減にしなよ。バカバカしい。何で写真に光が入ることと、古代の因縁が関係あるんだ」
彼女は突然、咳き込んだが、それを抑え、顔を赤らめ、
「そ、そう。そうですよね」
禰宜がようやく言葉を挟むタイミングを見出し、
「では、後はご自由にご覧ください。写真もご自由にどうぞ。ただし奥の宮は撮影をご遠慮ください」

「奥の宮？」

「ええ、小さな祠があります」

「見学は構わないのですよね」

「どうぞご参拝ください」

狭い石段の道を登る。大きな白い岩があった。どこか奇異である。見上げた頂上に、小さな苔生した石像があった。苔に蔽われて何だかよくわからなかった。よくわからなかったが、上から見られているような気がした。見下ろされているような気が。

眼を凝らすと、微かに梵字が見えた、ような気がした。

針葉の凛とした太幹に囲まれた、嶮しい石段を上り終えると、奥の

宮はそこにあった。霧雨が降り始めている。黒い大きな岩が濡れて生き物のようだった。テイラノザウルス級のイモリか、異様に毛艶のてらてらした大きな黒牛のような感じだ。この生命のような息吹はもしかしたら太古と余り変わらないのかもしれない。

木造の祠は磐の上にあり、磐には人工的な感じがあった。

「巨石文化でしょうか」

八嶋がそう尋ねるが、私にもわからない。わかるわけがない。見たのでなければ過去に実際に何が起こっていたかは、本当にはわからないはずなのだ。歴史はすべて憶測に過ぎないということをほぼすべての人が忘れている。つまりほぼすべての人は愚劣なのだ。

自分で見たのでもなく、自分で調べたのでもなく、自分で検証したのでもないことを、さもよく知っているかのように述べ立てて、盛んに議論するすべての者は妄言家に過ぎない。すべての事象は懐疑され、再度再々度何度でも批判・検証を繰り返されなければならない。批判されないものは必ず腐敗する。

周囲は異様であった。周りを囲むように数々の石彫りの像がある。さほど大きくはない。高さが１ｍくらいの円筒形だ。トーテム・ポールにも近い。雨に穿たれ、風に磨られ、かたちは崩れているが、人の顔であり、嘆く顔、怒る顔、歯噛みする顔、いくつもあるが喜悦や幸福はない。

遠雷が聞こえる。
突如、木の枝がバチバチッ、バチッと音を立てる。原因がわからない。
「神域か」
私は呟いた。八嶋が、
「天平さん、何かおかしくないですか」
「そうかな」
「わたし、怖い」
私はあなたの方が怖いと言いたかったが、念のため、やめておいた。
「じゃ、雨だし、引き返すか。どうせ写真も撮れないしね。

しかし、この祠の中、何となく見てみたい気分になって来たな」

…禁じられたるものを我は求む。ホメーロスの『オデュッセイア』でオデュッセウスはセイレーンの歌を聴きたいと欲し、わざわざ自身をマストに縛り付けさせ、決して解かないよう命じたではないか。好奇の精神は動く生き物の基本である。

「そう思わないか。何が秘められているのか」

「やめてください！」

「わかっているよ、冗談だ」

降りる。平気を装っていたが、緊張していたのだろう。疲れた。杜を出た瞬間は、ほっとした。ホテルに着いて脱力状態になる。部屋で

食事を終え、ビールを飲みながらくつろぐも、八嶋が言った。
「咲御魂獅厨痲神社って、鎮魂のために造られたのではないでしょうか」
「何を唐突に」
「だって〝みたましずめ〟ですよ、日本の神社って、鎮魂目的のものが結構あるみたいじゃないですか、明神様とか。咲御魂って、幸き御魂のことですよね？　鎮魂系神社って、褒めて崇めて讃えているパターンが多くないですか」
「そうとも限らないが。
でも確かに歌仙(うたひじり)として後世に祀られた柿本人麿が道

殣（行き倒れの餓死者。野垂れ死に）者を憐れんで歌った和歌には鎮魂の意味があったというし、平家物語は鎮魂のために作られたと言われるよね」

「日本人は、昔から不幸な死に方をした人が怨霊になると考えて恐れ、歌にしたり、高貴な人ともなれば物語にしたり、天神様の菅原道真みたいに神として祀って神社に鎮めて守護神のようにしたりとか。怨霊信仰みたいなものがありましたよね、恨みを残して死んだ者の霊魂が生きた者に祟りをなすと信じていたようです」

「で、それが？」

「わからないんですか、子孫なのに。

裏切られて非業の死を遂げた眞神の大貴族、天平天憤咽火去（あふれひこ）の御魂を鎮めるために咲御魂獅厨痲神社が建てられたのではないでしょうか」

「そうかな」

「あり得ない話ではないと思います。それに現地のあの異様な雰囲気が」

「そうかな。もう成仏していると思うけどね。死すれば生きていたときの価値観や悲憤慷慨なんて、形骸に過ぎなかったことに気が附くはずなんだ。恨みなど生きている者の妄りな考えさ」

「そうでしょうか。

そんなふうに言ってしまうと、何だか人生の否定みたいです。そもそも人がこだわってることが無意味みたいな言い方で」

「そんなことはない。

無意味すら〝無意味〟だからね」

「は？」

「懐疑の涯に逝けばね。無と観ずることも、感じることも〝無〟となる」

私はいくつか懐疑論について議論しようかと、酒の勢いで考えたが、やめた。どうせわかりはしないし、理解されても意味ないし、彼女の人生に利益するところもないし（むろん私にも）、最後は私も死ぬし、

彼女も死ぬのである。

すべてはムダだ。〝無意味〟だ。

理解も無理解もまったく同じ、いや、それ以下(それ以上?)、同じも異なるも〝同じ〟なのだ。

かつてルネ・デカルトは言った、すべてについて疑え、と。バカバカしい。できるわけがない。バカバカしいと言いながらも、かつて私は懐疑十方法というオリジナルの懐疑手順法を作ったことがある。何の学識も権威もないド素人の私が作った懐疑のマニュアルだ。

自分の作ったものだから自分では合理的なものができたようにも思うが、まあ、これぱかりは自己超越して俯瞰しないことには何とも

言えない。

しかしただ一つ言えることは、この懐疑十方法のとおりに疑おうとすると、論理の束縛（規定）によって自縄自縛的に自家撞着を起こし、論理性は破綻してそれを維持できず、途方に暮れるであろう（いや、必ずや途方に暮れる！）。

懐疑という行為には限界がある。無理があるのだ。懐疑は論理的な解析や、論理的な展開を礎とするが、論理そのものが論理規定上の自己矛盾を孕むため、論理規定を原因とする自家撞着が生じる。デカルトは無理難題を申し付けているのだ。すべてに就いて疑えるわけがない。

さて、私が勝手に創った懐疑十方法は左のとおりだ。

Ⅰ　考概（意識）の内容（質）・本質への懐疑
Ⅱ　それが存在する意味への懐疑
Ⅲ　そのカタチであることへの懐疑
Ⅳ　そういう設定であることへの懐疑
Ⅴ　内容（質）・本質ということへの懐疑
Ⅵ　意味ということへの懐疑
Ⅶ　カタチということへの懐疑
Ⅷ　設定ということへの懐疑
Ⅸ　懐疑への懐疑

Ⅸ　論理（論理という形式・方法論）への懐疑

この10項目を実践しようなどと試みようものなら、思考の涯で途方に暮れるに相違ない。呆然唖然と立ち尽くすしかなくなる。どう考えてよいかさえわからなくなる。まったくどうしてよいか、どうしようもないとさえも言えなくなって、「あゝ、わかんない！」って叫びたくなるに相違ない。

あたかも眼が眼を見ることを為し得ないように、論理が論理自体を批判することは論理規定上の自家撞着を起こしてしまうので、まったく不可能である。

まず、論理の規定によれば、批判の対象になっているものを用いた

証左は、証明として信ずるに足りないという規定がある。

ここでは論理は（論理の規定を理由として）使用を禁じられていると言ってよい。とすれば、使用を禁ずるもＮＧかと言えば、論理の規定が使用されているからだがなぜ禁ずるもＮＧなのではないだろうか。であり、論理の規定を使用した判断はダメというのも論理の規定に拠るので、この判断もまたＮＧ……って晰らかにおかしいし、無限の繰り返しになってしまう。

ラッキョウの皮剥きみたいだ。論理の妥当性を論理で証左しようとすれば、論理に拠って証左不可能に陥るのである。

しかし困ったことに、我々に於いて証左と言えるものは論理以外の

手法では、まったく知られていないのだ。証左という方法概念が論理の規定の一部ではないか。

じゃあ、どうすりゃいいのか。どうしようもない。どこにも着地できないし、そもそも着地のしようがない、という結論にすら着地できず、って言う結論にも……これもまた無限遁走曲だ。

今までどうやって何をわかっていられたのか（又はわかった気分になっていられたのか）まったく以て不思議になる。ただ唐突に、わかった気分だけがあったことに気が附く。

唐突、つまりはすべて無根拠で、無条件強制的決定だったのだ、と。

そして終には、わかるということが、何もわかっていないというこ

と大差ないことに気が附く。理解とは、心理的なもので、気持ちの問題でしかなく、心的な現象であって、理は微塵もなく、気が附くと、自分がどこにいるのか、何だったのかもわからなくなる。

これに気が附くことが無知の知と言えなくもなくなくもない。ソクラテスはそれを出発点とした。しかし私のこれは到底スタートができるような代物じゃない。

どこでもない場所だ。西も東もわからなくなる。そもそも方角とか方向とかいう概念が崩壊する。空間性すらも喪われる。時間性（時間性とは時間ではない）も無みされる。

時間性がなければ因果律ということ自体が無効だ。前後がないから

だ。

どうにもならない、どうしようもない。諦めて放置するしかない。どこにも落着けない。放置という結論にさえも。未だ遂げず、いかようにも収まらず。未遂不収だ。なされるがままに身を任すのか？　いや、運命すらも死に絶えるだろう、この極北地では。

論理が崩壊すると、選択という概念が崩壊する。選択とは、複数の選択肢があり、その中の一つが選ばれていくという考え方だが、懐疑によって個々の選択肢のイデアたる特定性（又は差別性）が崩壊し、選択肢自体が非存在ですらなくなり、なおかつそれらを択ぶ根拠を構築すべき論理性が崩壊すれば、選択は死滅する。すなわち運命はまっ

たく存在の余地がない。

かように途方に暮れるのである。だから喫茶去。お茶でも飲むしかない。

実に愉快だ。このような破壊的な見解には、パンキッシュな喜悦がある。

唾棄の痛快、まさにパンクだ。破壊、逆説、愉快だ。つまり人は歓びを求めるのだ。強い力だ。人の性だ。だが架空だが。

「彼らは怨んではいないよ。

違うかな。死すれば執著すべき依拠もない。論理も要らない。すべて空だ。

では、伊叙敝家のあなたは現代でも、天平家の末裔である私を剋しているのかい？　いや、実際、そうだね。私はいつもあなたにビビッているよ。あはは。まさに因縁だね。前世の縁だ。ふふふ。どうやら歴史は繰り返すらしい。

これも神の裁きか、天罰か。我が一族、被征服民族である我が祖先らはさぞかし罪を犯したのであろう。お笑い草だ」

彼女は怯えたような眼で私を見た。私が何かに憑かれていると感じたに違いない。そう想うと人は駈り立てられるものだ。唆されたように感応する。

「やはりあの祠を観よう」

私は立ち上がる。

非合理。理不尽。天邪鬼。そんな気分が私を駈り立てた。自滅回路だ。とても愉快だ。黒猫を埋めた壁を壊す男の気分だ。パンクだ。

「正気ですか、しかもこんな時間に、それに酔っているし」

正論だ。だが論理など無力だ。形骸だ。いや、それですらない。自然の叡智であるロゴスに聴従する。ロゴスは非論理性だ。ロゴスに聴従するならば、理窟は捨てられる。理性は唾棄される。

「タクシーを呼ぼう。すぐさ。やればすぐだ」

「やめてください」

「独りで行くから心配ない。私は天平家の末裔だ。見る権利があるの

さ。だが権利とは何だ。権利を持って来いと言われても、見せることができない」

タクシーはなかなか来なかった。激しい雨にライトを当てて、ようやく宿の前に急停止する。

「どちらまで」

「咲御魂獅厨痲神社ね」

ちらりとこちらを振り返ったが、何も言わなかった。神社に着くと、運転手は訝しがり、

「迷信臭いことを言うようだが、あまり夜の神社には近附くもんじゃないですよ、お客さん」

私が天平家の者だというと、それ以上は何も言わなかった。
さてタクシーが去ってしまうと真っ暗だった。
それでも山の威容が感じられ、怖ろしげだった。私は傘も差さなかった。木々の枝々は風に騒ぎ、ぶつかり合って激しい謗りの言葉で狂騒した。周りを怒号で囲まれたような感じであった。足を滑らせながらも、磐を上がる。
大きく息を吸い、観音扉に手をかける。暫時躊躇するも、それを開けながら、
「さあて、おまえはまだ恨んでいるのか」
見えなかった。昏い。

でも何か在る。それを感じる。スマートフォンのアプリを使ってライトを当てる。すると古い厨子が浮かび上がってきた。

「これは……」

開ける。しかし厨子は空っぽだった。そうだろうと思っていた。

翌朝、山盛弊に連絡を取ったが、

「ええ。写真のことは、申し訳ありません、実はわかっていました。でもわかってからが逆に怖くなって。事情を知ってしまったせいか、いや、あの神社の気配に気圧されてしまったんでしょうね。安蘇さん

も、それでいいと言ってくれたので、つい」

一応、安蘇にも電話してみた。

「まあ、あれもいいかな、って思って。心霊写真みたいで。え？　僕の先祖のことですか？

いやあ、行ってから初めて知りましたね。確かに実家が近いんですが。どうとも思いませんでしたよ、行くまでは」

……因縁生起因果応報輪廻転生か。などと空疎に呟いてもみる。

「え？　何か」

「いや、何でもない。

そのことで、カメラマンの彼はかなり気にしてたようだが」

「あゝ、そうです。
山盛弊くんはかなり気にして、って言うか、怖がっていましたけどね。まあ、そういうことって、気にすれば気になるし、気にしなければ気にならないもんですよ」
「そりゃそうだ」
何となく時間のムダを感じたので、私は電話を切った。
さて、私たちは天平普蕭を宅へ向かう。
神栖檜偏村から安房市を経て、赤門戸町、薙久簔町までＪＲを使い、薙久簔町で眞神鉄道に乗り換えた。眞神線は単線で、とてものんびりしている。駅は薙久簔を除けば、三つしかない。

ゆっくりと進む。龍呑村、畝邨村を経て、終着駅である眞神村に近附く。のどかな風景のせいか、私は次第にゆったりとした、お花畑な気分になってきた。

春の霞に揺蕩う、日当たりのよい川の土手の草のような気分だ。朦朧としながらも、夢のようにぼんやりとしながら昨晩のことを八嶋に説明する。まるでデルフィ Δελφοί の巫女だ。

昨晩の件については、むしろ彼女の方から朝一番で訊いてくるかと思っていたが、意外にも何も訊いてこなかった。私の方も自分の脳内での整理が終わっていなくて、しかもしばらくは整理する気もなかったので、彼女が切り出すまで自然と待っていたが、一向に気配もなく、

やがてはいつ来るのかと気にして疲れるようになり、もはや訊かれるまで待てず、今こうして説明しているという、無様な状態になってしまっているわけである。しかし私が話をしても、よく理解できていないようであった。

理解できない場合は質問するのがいつもの彼女だが、口をつぐんでいた。質問したくないのだろう。思い出したくもないようだった。やはり怖い人には怖いようだ。したくなければしなくても良い。訊かれなくとも私は語っているわけだし。

気まずい中途半端な空気なまま、眞神駅に着いた。眞神族の聖地、彼らの本拠だ。

茅葺屋根の無人駅である。何気なく時刻表を見ると、６時半以降は電車がない。木材は古く乾き切っているが、清々しい。貧相だが、それゆえに清廉だった。

「いいところですね」

改札を出て空気に触れ、彼女は急に生き生きとして、解放されたように言う。風も空も、何もかもがすべて清らかで爽やかだ。

平らかで整った水田(この季節、水はないが)、濃い緑が鬱蒼とした低い岡に囲まれ、遠くに蒼き山岳が見える。蒼穹は見上げれば見上げるほど遙かに奥があり、星が透けて見えそうだった。

「歩いても行けるようだ。バスもあるらしいが」

「あれ、バス停ですかね」
「みたいだ。見てみよう」
行ってみる。そこには、板で屋根を作った江戸時代の看板のようなものが立っていた。屋根の下の板には数字の書かれた表があり、バスの来る時刻を記した表のようであった。きっと雨の日は駅の軒の下にあるベンチに坐って待つのであろう。
「しばらく来ないですね」
「やはり歩くか」
「道は大丈夫なんですよね」
「だいたい、わかるよ」

寒い季節であったが、積雪も風もなく、弱々しくも陽射しがあって、我々は比較的愉しく進めたし、歩くうちに暖まってきた。

畑の中に数本の老樹が唐突に立つ場所があり、八嶋が指差す。

「見てください、あれ、祠ですか」

「あゝ、そうだね。小さな神社だ」

「平らな所にぽつりと。何か象徴的ですね」

「考え過ぎだよ」

「むしろ大社よりも、ああいう方が偉大に見えます」

「思い込みだね。戦国時代の茶人みたいなことを言う」

「そうなんですか」

「たぶんね。
確かなことは何一つわからない。わかるという人間は愚かなだけだ」
彼女はまた黙ってしまった。
どうして世間は真実から眼を逸らすのか。科学的にも事実であることから。
天平家は水のない水田の真ん中に浮かぶ島のように、こんもりした杜がある中にあった。まるで古墳のようであったが、実際、先祖の奥津城である墳墓があるそうだ。
古くて広壮な門から敷地に入り、森を歩いて玄関へ着いて人を呼ぶと、普蕭は薙久篶町の古本屋にいるという。彼はそこの店主をやって

いるらしい。もはや眞神鉄道に乗る気がしなかったので、タクシーを呼んでもらって、町に戻ると（結構な散財だ。哲学愛好者も財布の中身で一喜一憂するのである）、ベルベットの濃紅のシャツに大きなカフスの附いたコート、サイケデリックな服装の普蕭が確かにそこにいたが、

「僕も少し知るが、その辺の事情は、真兮くんの方が詳しいな」

と言う。

私たちは随行してくれると申し出てくれた普蕭を伴い、再びタクシーに乗り（本当に散財だ、と嘆く自分が情けないが、歎きは止まらないのである）、龍呑村に向かった。

行ったり来たり、ジグザグだ。迷宮のような気分だ。ラビリントスは双頭の斧という意味らしい。

クレタ島にあったミノス王の象徴が双頭の斧だったとか。

龍呑村のメイン・ストリートは旧街道から分かれて龍呑神社参道へ通じる道である。道の両脇に京都の町屋造りのような、間口が狭く奥に長い家が瓦屋根の軒を並べている。

骨董屋を兼ねる真兮の家に着いて、来訪の旨を告げると、案内され、露地を通って奥の茶室へと向かう。

小さくて寂びた茶室だった。

端坐する彼は奇妙な男だった。

天文占星八卦龍脈風水竹噬太占亀甲卜占を司る天易家は、いわば古代の学者の家柄だと普蕭が教えてくれていたので、そういうつもりでいたが、まったく以て予想外、というか、予想のしようもない格好の男がいた。

天易真兮は伝統的な茶室に、魔女のようなつば広の尖がり帽子を被り、房の肩飾りと金糸の飾り紐（飾緒）をつけたコバルト・ブルーのサテン地の軍人の礼装用フロック・コートを着て、スキニーな16オンスのデニムのジーンズを穿いている。外に置かれた靴はかなりくたびれて、ルーズソックスのように弛んだロング・ブーツだった。片眼鏡をかけて、長い髯を生やしている。訊けば未だ25歳だという。

「少々奇妙な経験をされた、というところですかね。

あの神社の正確な創建は平安時代初期です。伝承では６００年頃とは言うけれども、古代からの祭祀場ではありましたが、今ある社の主旨とは直接的な関係はありません。

その辺を解っていながら、敢えて混同したのだろうと思われます。あたかも謀殺の直後に慰霊したかのように装うために。

実際は、平安初期に、伊叡敝家に事故や天災が続いたため、陰陽師に占わせたところ、２００年前の祟りと言うので、安蘇生井に命じて創らせたものです。

以来、鎮魂の儀が密やかに行われていたらしいのですが、鎌倉の時

代には早くも廃れたようです。というのも天平家の人間が「我が祖は怨霊などに堕することなし。さよう下賤下卑に非ず」と嫌忌し、祠を開けて、中の像を天の下に晒し、日を当てて風に弄らせ、解放したからです。

もしかしたら、あなたたちも既に見ているかもしれないですね、白い大岩の上に安置されて苔生した小さな像を」

あれか……そう思った瞬間、私は清らかな微風を額に感じた。

爽やかな気分だ。

あゝ、何とも言えない。

事実しかない。乾いている。無すらない。ただ事実があるのみ。こ

の世に理窟はない。妙機によって活命するだけだ。

天易の点じた一幅の茶を含み、緑の微薫に撫でられる。ああ、神だ。そう想う。神を感じる。真実に還る。何もかも捏造だ。そもそも神も人も概念である。もっと直截に神を感じよう。さあ、素になれ。素になろうよ。神を感じよう。真実が大事。生命こそが真実。真実のみを生命と言うべきだ。神は生命。それが正しさだ。正しいことを為すべきである。

しかし正しいこととは、どういうことかを問うても、到底その定義はない。それでも為さなければならない。答はない。強さ、光り、肯定、生命、きよらかささわやかさ、自らの魂に甦る正しさこそが正し

きこととして強く強く生きるしかない。

非情なるこの世界の波瀾に棹を差し、筏を荒海に渉らせるのは、ただこれでしかない。ただそのとき神を感じる。道標だ。

拠り所のない無明の世界、不安なこの現実世界に確固たるプレゼンスをもたらすのは、只管なるこの決意でしかない。

違うだろうか。違ったら直せばよい。それが現実だ。他に何がある？

さて、以上が顛末である。

そう言えばはっきり言っていなかったが、神社の写真はしっかり撮

れた。コラムの件は何の問題もない。そんなもんだ。何もわからなくとも支障はない。

